

ゼロエミッションの未来に向けたさらなる一歩

こちらは、英文記事「[Another step towards a zero-emission future](#)」（2020年12月21日付）の和訳です。

2020年最後の Insight で

は、Senior Loss

Prevention Executive で

ある Jarle Fosen が先週、
自律運航を目的に作られた
世界初の完全電動式コンテナ船、「Yara Birkeland」

号を訪れた際の貴重な模様
をお伝えします。明るい話
題で1年を締めくくりたい

と思います。皆様どうかお体にお気をつけて穏やかな年末年始をお過ごしください。そして、よいお年をお迎えください。



12月17日、私と同僚らは [Yara Birkeland](#) 号に招かれて胸が高鳴っていました。Yara Birkeland 号は世界初の完全電動式でゼロエミッションのコンテナ船です。ポルスグルン（Porsgrunn）を船籍港とし、11月に Yara Norge AS に引き渡されました。訪船時、本船はポルスグルンからホルテン（Horten）にある自律航行船試験海域までバッテリーのみで運航した処女航海を終えた直後でした。

濃霧の立ちこめる朝、私たちはホルテンにある旧ノルウェー海軍造船所に到着しました。港の中に入ると、霧の向こうから、鮮やかな青い色をした最新の Yara Birkeland 号が浮かび上がってきました。そして、その背後には白い [Christian Radich](#) 号もぼんやりと見えました（Christian Radich 号は、若き船乗りたちを乗せて訓練を行うため 1937 年に建造された帆船です）。ノルウェー船の新旧世代が居合わせた貴重な場面でした。この温室効果ガスを排出せずに航海が可能な両船を隔てていたのは、50メートルほどの距離と、80年分の技術・イノベーションでした。

Yara Birkeland 号が建造されたのは、袋詰め肥料をコンテナで海上輸送することで、Yara 社の工場からブレビック（Brevik）にあるコンテナターミナルまでの年間4万台分のトラック輸送を削減するためです。これによって交通事故も少なくなり、完全電動運航の状態でなくても、この地域での汚染物質や温室効果ガスの排出を大幅に削減できるようになります。

Yara Birkeland 号プロジェクトのマネージャーである Jostein Braaten 氏は、本船見学を訪れた私たちを温かく迎えてくださいました。貨物を満載した120本のコンテナを積んでの初めての航海、初めての試験が無事成功したことを確かめて満足している様子でした。訪船したのは、Bergvall

Marine 社の保険ブローカーの方々、そして Gard からは私の他に Senior Underwriter の Steinar Jørgensen、Senior Claims Adviser の Karl Petter Muhlbradt です。本船には現在乗組員が数名乗っていますが、ブリッジはモジュール式となっており、本船が自律運航できるようになりその旨が認証された際には撤去できるように設計されています。



ホルテンー帯は、ノルウェー沿岸管理局によって国の自律運航船試験区域に指定されています。新型コロナウイルスの感染拡大の影響で思うようには進んではいませんが、Kongsberg Maritime 社と Yara 社は、本船が商用運航を始める前に、両社の全パートナー、大学・研究機関に自律技術・システムの総合試験を行ってもらうことを目指しています。

Yara Birkeland 号の P&I 保険ならびに船体保険の保険者として、少しばかりではありますがこのプロジェクトに携わることができ光栄に思っています。今回このような画期的な船を見学する機会をくださった Yara Norge AS ならびにプロジェクトマネージャーの Jostein Braaten 氏に感謝申し上げます（見学の際はマスクをしっかりと着用し、ソーシャルディスタンスを十分に確保しました）。私たちが基本理念として掲げる「[Together we enable sustainable maritime development（海運事業の持続可能な発展を共に実現する）](#)」のように、来年も本船の自律航行実現に向けてのさらなる進展があることを期待しています。

本情報は一般的な情報提供のみを目的としています。発行時において提供する情報の正確性および品質の保証には細心の注意を払っていますが、Gard は本情報に依拠することによって生じるいかなる種類の損失または損害に対して一切の責任を負いません。

本情報は日本のメンバー、クライアントおよびその他の利害関係者に対するサービスの一環として、ガードジャパン株式会社により英文から和文に翻訳されております。翻訳の正確性については十分な注意をしておりますが、翻訳された和文は参考上のものであり、すべての点において原文である英文の完全な翻訳であることを証するものではありません。したがって、ガードジャパン株式会社は、原文との内容の不一致については、一切責任を負いません。翻訳文についてご不明な点などありましたらガードジャパン株式会社までご連絡ください。